

Title	国語引用構文の研究
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43079
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤 田 保 幸
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 4 8 9 7 号
学位授与年月日	平成 11 年 7 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	国語引用構文の研究
論文審査委員	(主査) 教授 前田 富祺 (副査) 教授 工藤真由美 助教授 金水 敏

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語を主たる対象に、日本語の引用表現を、文法論の問題として、意味—統語的に考究する。

本論文は、第一章「序論」、第二章「総論」、第三章「各論Ⅰ」、第四章「各論Ⅱ」、第五章「結論」などからなり、400字詰め原稿用紙にしておよそ1700枚ほどとなる。

第一章では、前提的な考察を行い本論文の序論とする。

第二章では、第一章での前提的な考察をふまえて、統語的引用に関する基本的な問題について、筆者なりの理論を提示する。第一節「はじめに」に続く第二節で、まず、統語的な引用表現における引用されたコトバを通常の言語記号とは異質なものであると位置づける。第三節では、以上の本質論を承けて、引用されたコトバが、実際どのように文の構成に参与し、さまざまな構造を形成するのかを論じる。第四節では、文中引用句「～ト」の文の構成要素としての性格を検討する。第五節では、行為・出来事としてのコトバをひく引用表現の他に、モノとしてのコトバをひく引用表現も存在することを指摘し、その主な二つのタイプ—「コトバの痕跡・残存をひく引用」と「言語材をひく引用」について、それぞれ意味—統語的に考察するとともに、相互の位置づけを確認する。第六節では、文中引用句「～ト」と連続する「～ト」型の副詞表現を概観するとともに、引用されたコトバを文（及び連文）中へ導入する諸表現をも概観する。第七節では、引用研究において今一つ重要なテーマとなる、所謂「話法」の問題に関する基礎理論を提示する。おわりの第八節では、第二節から第六節にわたって述べてきた引用構文の統語論的な側面にかかわる諸問題と、第七節でみた「話法」の問題とが、文法の問題としてそれぞれどのような位置づけを与えられるのかを示して、全体のまとめとする。

第三章では、第二章での統語的引用にかかわる原理的な考察をふまえて、引用構文の表現をさまざまな角度から具体的・個別的に分析し、統語的な引用研究の可能性を探る。第一節で本章を概観し、第二節で引用構文を整理した上で第三節は「～ト疑う」について検討し、ついで「叙実動詞」の問題について述べ、意図引用と呼ぶものなどについて引用構文を切り口に、どのような意味—統語的研究が可能かという問題意識に立った、筆者なりの方法の開拓と実践を述べて、統語的引用研究の意義を例証しようとする。

第四章では、引用研究の射程をその周辺に広げて、統語的引用に関連するいくつかの重要な問題について論じている。第一節では本章を概観し、第二節では、複合辞について一括して述べる。第三節では、統語的引用と連体修飾の問題について、基本的な考察を行う。第四節で、統語的引用の周辺として、関連して問題となるいくつかの〈内容〉補充節(句)の問題、項目列記の「～ト」表現、カギカッコ使用の実際の問題などを論ずる。

最後に、第五章として国語学における引用研究・文法研究の流れの中での本論文の位置づけを示して、締めくくりとする。

論文審査の結果の要旨

文法の問題として論ぜられる引用表現の研究、すなわち、統語的引用の研究は、一二の先駆的業績や注目すべき研究があったことを別にすれば、実質的には、著しく立ち遅れた研究領域であった。その中で、著者は早くから精力的に研究を進め、今回このような形で論文としてまとめたのである。本論文は、その未開拓の領域全般にわたって、はじめに一貫した、そして、まとまった考察を展開したものである。

引用されたコトバが文の構成要素として組み込まれた統語構造の表現としては、文中引用句「～ト」によるものが、最も典型的で論ずべき問題も多い。本論文でも、引用句「～ト」と述語(述部)とが相関構造をもつ「引用構文」を主たる考察の対象とする。

著者があくまでも言語事実そのものに即して考察し、独自の見解によって統一的に引用の問題を研究したところは高く評価される。ただそのような立場に終始したところに、なお今後考えるべき課題も残されている。たとえば、生成文法における議論を参照することにより、なお考察を深めるところがあるかもしれない。言語行動全般の中で引用の問題を考え直すことも必要かもしれない。引用節をパースのイコン記号になぞらえて考察したところも注目されるが、このことにとらわれすぎると議論が一面的になる心配もある。著者が引用構文を「述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す」関係(α 類)、「述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す」関係(β 類)とに二分したことは大きな功績であり、以後の研究者に参照されることも多い。ただ、著者が β 類の方を典型的、基本的なものとして認めていることからすれば α 類・ β 類の命名は逆の方が良かったかもしれない。

以上、本論文は独創的であるだけに、なお今後の補正を必要とする点もあろう。しかし、日本語の引用問題を構文・意味の面から幅広く総合的・体系的に取り上げた最初の論文として画期的な論文である。特に諸説の整理ではなく、独自の見解によって全体をまとめた点は高く評価されるのである。課題は残るとしても、今後国語の引用構文を研究する者にとってかならず参照しなければならない論文である。このような次第で本研究科委員会は本論文を博士(文学)の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。